

「自分を見つめ、綴り、語り、つながる子どもたち」

～部落差別の現実には学びながら、反差別のなかまづくり～

1 であい

子どもたちの笑顔が素晴らしい。

「あなたがすき、私がすき、美咲野小学校がだいすき」

「ありのままのあなたでいいんだから、あなたを大切に思っている人が必ずいる。」

悲しいこと、せつないこと、苦しいこと、嬉しいことなど、一緒になって肩をふるわせることができる、自分の思いを語ることができる。隣にいる人の悲しみや喜びが聞こえる。見える。そういう共感できるなかまをともにつくっていきましょう。とあいさつをしました。子どもたちに明るい未来を用意すること、それが私たち大人の責任です。…と

わたしがいつも大切にしていること

であい … 子どもと向き合うということはどういうこと
子どもの事実から出発するということ
子どもの背景をとらえるということ

立ち位置 … いつも子どもの隣に座っている自分がいるのか

つながる … 子どもを「見つめ」自分を「綴り」なかまに「語る」
「見つめる」とは・くらしを見つめる。
「綴る」とは・くらしを綴る。
「語る」とは・くらしを語る。

わたしがいつも自分に問い続けていること

子どもを語るとき、親を語るとき、なかまを語るとき、部落を語るとき、実践を語るとき、それは、「自分を語る」ときであるといえます。

「自分を語る」から子どもたちにも「自分がある」部落問題が自分の課題となります。部落差別にたち向かって生きる子どもたちとはどんな子どもたちか。それはどんな教育のいとなみの中で育っていくのか。そのとき、教師もまた、部落差別をはじめ一切の差別に対してたち向かっていけるものであること。などの問いあいを通しながら、私たちは私たちの「足場」を確かにしてきました。

差別が見えなかったら、差別をなくす学習にはなりません。

差別が一番見える位置とはどこですか。それは自分のくらしのなかにこそ見えるのです。

差別をなくす学習は、差別をなくす行動につながらなければ意味がありません。

行動は、自分の課題だから行動できるのです。では、自分の課題とは何ですか。

2 「43項目の質問状」反差別のなかまづくり

「これは差別ではないですか。先生は日頃差別はいけないといっているではないですか。」

「先生の日頃言っていることは、嘘なんですか」

「私たちだけが高校へ行けますか。」

教室で、「中卒で落とされたのですか。」

「母親だけでと言う。理由で落とされたのですか。」

と43項目の質問状を作ってきました。

3 自分に誇りを、児童養護施設の子どもたちと

母親に会ったことのない私は、施設で生活しています。だけど私は母親を、きらったり、うらんだりしていません。いろんな人に出会ってきたからです。私がこうやって今幸せを感じているのは、やっぱり私を産んでくれた母親がいるからだと思っています。

私は「お母さん」にあったことはないけれど、やっぱりお母さんが大好きです。

私はお母さんに会ったら「おかあさんありがとう」といいたいです。

そして、会えない母親の幸せを願っています。

4 「来民開拓団の真相」に学ぶ、保幼小中高のつながりを求めて

今、「部落」を語る必要性とはなにかと思いますと、「部落」を語らなければ、部落問題学習が子どもたちの意識に残らないのではないかと危惧しています。当然、部落差別とは何かが分からなければ、差別を解消しようとする問題意識は形成されません。

だからこそ、今一度「部落」を語り、「自分」を語り、「家族」を語り、「来民開拓団の真相」を語ることだと強く感じています。

部落問題についての学習とは・・・

部落問題を通して深く自己を掘り下げ見つめ直す営みです。

大切なことは、その中を生き抜いた人々、生き抜いている人々と豊かに「出会う」ことではないでしょうか。

5 「人の世に熱あれ、人間に光あれ」

子どもたちを中心に、自分のくらしを見つめ、語り合う実践を通して、互いに尊敬しあうなかまづくりができてきました。それは、新たななかまとの出会いでもあります。そこに、人権教育の魅力があります。

人権教育はけっして人を変える教育ではありません。

まず、「自分が変わる教育」です。

このように、「同和」教育は、人権教育の基底を拓いてきたと言えます。これからも「同和」教育の「遺産と教訓」を引継、人間の優しさと尊厳のかがやきに貫かれた人権教育にさらなる自信と誇りをもって歩んでいきたいと思っています。